

災厄と人々のリアリティ

西芳実

(にしよしみ一京都大学地域研究統合情報センター准教授)

大きな災厄は人々のリアリティに亀裂を生じさせる。災厄が起る前の日常に潜んでいた課題を顕在化させ、社会に深刻な対立をもたらす。その一方で、災厄の経験と真剣に向き合うことは、社会の傷を修復し、新しい関係を開く契機にもなる。

インド洋沿岸諸国に甚大な被害をもたらした2004年スマトラ沖地震・津波(インド洋大津波)で最大の被災地となったインドネシアのアチエ州は、被災にさきだつ30余年のあいだ、独立派ゲリラと政府軍との内戦状態にあった。戦闘は二つの軍事勢力の間にとどまらず、相手側の協力者とみなされた一般市民が日常的に拉致されたり殺害されたりする緊張状態のなかで、内戦の犠牲者の遺族とそれ以外の人々との間にはリアリティの大きな断絶があった。肉親が内戦のために命を落としたことを認めれば、肉親が一方の軍事勢力に加担していたために他方の軍事勢力に狙われたと認めることになり、遺族もまた関係者として内戦に巻き込まれることを意味した。遺族は身近な者が何

者によって殺されたかを知りながらも、その死を公に語ることはできず、犠牲になった者とならなかった者とのリアリティの断絶を修復することは困難だった。加えて、内戦下のアチエは戒厳令によって人の出入りが厳しく制限され、情報も検閲されていたため、アチエの状況はインドネシアのほかの地域の人々にも限定的にしか伝えられず、アチエの人々は地域社会内でも外に対してもリアリティの断絶という問題を抱えていた。

2004年スマトラ沖地震・津波は、アチエに死者、行方不明者16万50000人に及ぶ被害をもたらした。津波犠牲者の遺体を弔う作業は困難をきわめ、市中に流された遺体の埋葬が終わるまでには2か月を要した。アチエを襲った津波が家や人を飲み込みながら濁流となつて街に流れ込む映像や、津波が去り、地上の建造物が跡形もなく薙ぎ払われた集落の様子、そして道端に放置された遺体の中に行方不明の家族や知人を探す人々の姿は映像によって世界に伝えられ、インドネシアの内外の人々

に衝撃を与えた。見えない苦しみが見える苦しみになったこと
で苦しみの共有が可能になり、直接被災していない人と被災し
た人が結びつけられた。身近な人々を突然失い、生活の基盤を
根こそぎ奪われた痛みや苦しみは、災害の様子が映像で記録さ
れ、繰り返し報じられることで、直接被害を受けていない人々
にも伝えられ、それまでアチエを紛争地としてしか知らなかつ
た人たちも、人類史上未曾有の災害に襲われた社会としてアチ
エに関心を向けるようになり、インドネシアにとどまらず世界
中からアチエに支援の手が差し伸べられた。

『おだやかな日常』が描くのは、直接の被害が目に見えにくく、
身体的にも実感しにくい放射能汚染が人々のリアリティに断絶
をもたらし、社会に亀裂が生じている様子である。マスクをつ
け、放射能汚染の危険への対応を要求するサエコの姿は、放射
能汚染の危険性や不安を可視化させるため、他の人々の安心を
脅かす存在として忌み嫌われている。放射能汚染の実態は目に
見えず、幼稚園の先生や他の親たちのよって立つリアリティと
サエコのリアリティのズレを埋めるきっかけにはならない。マ
スクをつけたサエコと娘に対する幼稚園の人々の反応は、あた
かもその場の暗黙のルールを共有しない異民族に対する民族差
別のような反応であり、フランスの学校でイスラム教徒のべー

ルの着用をめぐる生じた問題を彷彿とさせる。

ただし、民族差別と異なるのは、この問題が親から子へと継
承されると限らないことである。マスクをつけるかどうかの判
断は、家族や職場や学校のように伝統的に人々の生活を支えて
きたコミュニティが下した判断ではなく、個々人が個別に収集
した情報によってなされる。サエコの不安な気持ちはサエコの
親にも共有されず、異なる判断を下したサエコを幼稚園は守つ
てくれない。

しかし、このことは同時に、コミュニティを越えて問題に対
応する関係を人々が新たに作る可能性をもさし示している。サ
エコを見て、幼稚園の他の親たちのなかにもマスクを着けだし
た人がいる。『おだやかな日常』は、一見すると異なるリアリテ
イを生きているように見える人々が出会うことで経験を共有す
る過程も描いている。孤立していくサエコとユカコを結びつけ
たのはわが子を失う経験だった。ユカコと夫の関係は、災害後
の経験の中で夫がユカコが過去に味わった孤独を理解したこと
をきっかけに修復された。

『おだやかな日常』は、ここに描かれているのが誰のリアリテ
イなのか、震災後をどれだけリアルに描いたのかという問いに
さらされ続けるだろう。それは、個人個人が尋常ならざる経験

をし、それぞれがリアリティを抱えてそれぞれの震災後を生き
ている世界では避けがたいことである。震災前と異なる感覚に
見舞われ、その経験を共有できる人の範囲は均質でない。さま
ざまな作品がつくられて、それを見た人が共感したり違うと思
ったりする。ここで問われているのは、どのリアリティが正し
いかではなく、物語を柔軟に書き換える力である。震災や放射

能汚染は人々のリアリティをばらばらにしてしまったかもしれ
ないが、リアリティを結ぶ契機は、実は震災前の経験の蓄積の
中にある。『おだやかな日常』は、一人一人が震災前の自分と震
災後の自分を繋ぎ合わせる営みの中にこそ、災厄によって引き
裂かれたリアリティの断絶を繋ぎなおす契機があることをおだ
やかに、しかし力強く示している。